

今週の為替相場見通し(2022年6月13日)

総括表	注	先週の値動き		今週の予想レンジ
		レンジ	終値	
米ドル	(円)	130.43 ~ 134.56	134.40	131.50 ~ 136.00
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル) (円)	1.0506 ~ 1.0774 139.85 ~ 144.25	1.0510 141.33	1.0400 ~ 1.0770 138.00 ~ 142.30
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル) (円)	1.2302 ~ 1.2600 * 162.91 ~ 168.73	1.2315 165.56	1.2150 ~ 1.2400 164.50 ~ 167.50
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル) (円)	0.7038 ~ 0.7248 * 93.77 ~ 96.88	0.7044 94.71	0.6950 ~ 0.7290 93.00 ~ 97.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1)今週の予想レンジ: 131.50 ~ 136.00 円

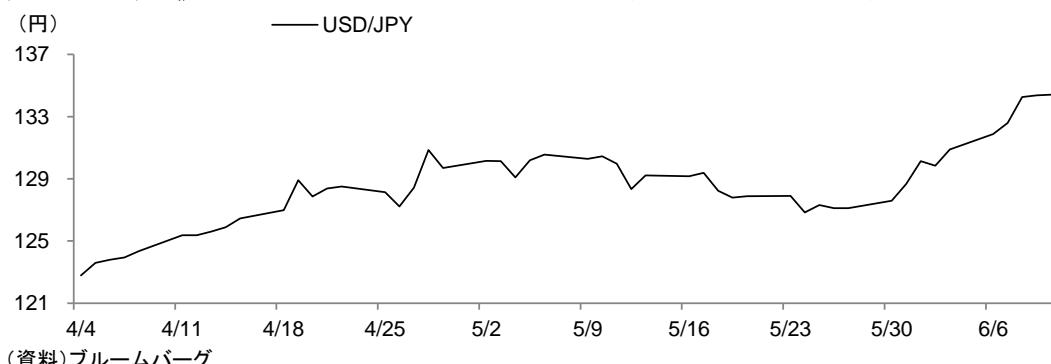
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は急上昇、約20年ぶりの高値圏となった。週初6日、130.75円付近でオープンしたドル/円は週安値の130.43円を付ける展開。海外時間では、黒田日銀総裁による金融緩和スタンスを強調した発言や米長期金利上昇を背景にドル買いが加速し132円台を突破、約20ぶりの高値圏まで急伸した。7日、ドル/円は前日のドル買いの流れが継続。更に豪中銀の予想を上回る+50bpの利上げに豪ドル/円が急伸するとドル/円も連れ高となり133円ちょうどを付けた。その後は、米長期金利低下とともにドル/円も132円台半ばまで下落した。8日、ドル/円は日本と先進各国の金融政策方針の違いを背景に円売りドル買い地合いが継続し、134円台前半で堅調に推移した。9日、ドル/円は一時134.56円まで上値を伸ばし約20年ぶりの高値を更新も、ポジション調整や輸出企業の実需のドル売りが散見され133円台前半まで急落。その後は米長期金利上昇にサポートされ134円台半ばまで反発。週末10日、ドル/円134円台前半でスタートし、134.48円まで上昇する場面もあったが、「財務省・金融庁・日銀の3者情報交換会合が日本午後4時から予定」とのヘッドラインが伝わると、円安けん制の動きを警戒した円買いが強まり、133.63円まで反落。売り一巡後は買い戻され、その後発表された注目の米5月CPIが予想を上回ったことからドル/円は買いで反応し134.40円まで急伸。しかし、インフレ加速を懸念した米株売りでリスクオフムードも強まっており、売り買いが交錯する中、直ぐに反落し、安値133.52円を付ける。その後、米金利の大幅上昇が下値をサポートし、じりじりと買い戻され134円台を再び回復し、134.40円で越週した。

今週のドル/円は上昇一服の展開を予想する。14日(火)～15日(水)に控えるFOMCに焦点が集まっており、発表直後には一時的に円安進行が予定される。しかしながら、6月と7月の2回分のFOMCにてそれぞれ+0.5%の利上げがすでに織り込まれており、想定以上のサプライズとなるような発表がなければ、上値は限定的となるだろう。一方で、日銀は緩和政策の維持を公言しており、日米の金融政策の方向性の違いから積極的な円買いとも考えづらく、今週については、ドル/円は高値圏でのもみ合い推移を予想する。また、米国では利上げを嫌気して株価が下落していることや、中国で再びロックダウンを始めていることなど、リスクオフによるドル/円の下落には留意したい。重要指標の発表は14日(火)に米5月PPI、15日(水)米5月小売売上高、14日(火)～15日(水)の日程でFOMC、16日(木)米新規失業保険申請件数などの発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/6～6/10)の値動き: 安値 130.43 円 高値 134.56 円 終値 134.40 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 1.0400 ~ 1.0770 138.00 ~ 142.30 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に下落する展開。週初6日、1.0730付近でオープンしたユーロ/ドルはユーロ圏が休日の中、ポジション調整によるドル売りにサポートされ1.07台半ばまで上昇も、その後は米長期金利上昇に伴うドル買いに1.06台後半まで値を落とした。7日、ユーロ/ドルは独4月製造業受注の冴えない結果に1.06台半ばまで下落。その後は米金利低下に伴うドル売りに支援され、1.07台前半まで反発した。8日、ユーロ/ドルは独4月鉱工業生産の市場予想を下回る結果や米金利上昇を背景に1.06台後半まで値を下げるも、ユーロ圏1~3月期GDPの上方修正を受け1.07台半ばまで値を伸ばした。9日、1.07台前半での小動きだったユーロ/ドルは、ECB政策理事会で資産購入プログラムの7月での終了決定や次回理事会での利上げ方針発表から一時週高値の1.0774まで急伸、その後は米金利上昇を受け1.0612まで急落と値動きの荒い展開となった。10日は発表された米5月CPIが市場予想比上振れしたことを見てドルが買われる中、ユーロは週安値である1.0506まで下落し、1.0510で越過した。

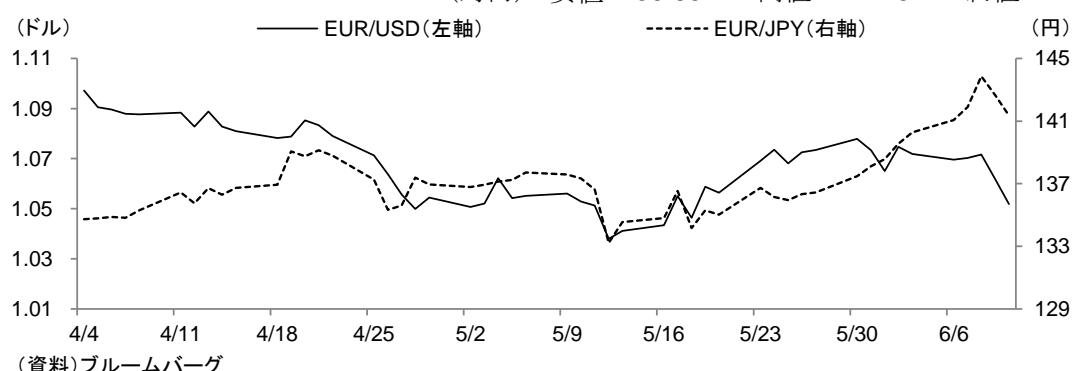
今週のユーロ/ドルは底堅い推移を予想する。先週公表されたECB声明文は、先日ラガルドECB総裁のブログでアナウンスされた内容をほぼ追認する形となった。7月1日でのAPP停止を発表、政策金利については7月会合で「+25bp引き上げる予定」、9月会合は「再び引き上げる予定である」と記されたことに加え、中期的な物価見通しが持続(persists)あるいは悪化(deteriorates)する場合には、より大きな引き上げ幅が適切であろうとされた。それ以降の利上げについては「緩やかかつ持続的な利上げが適切」と記されるに留まつたが、9月をもってユーロがマイナス金利を脱却することがほぼ規定路線となつたと見ていいだろう。この結果を受けて欧洲金利は軒並み上昇しており、足許の勢いは米金利のそれを優に上回るペースである。先週のユーロ/ドルはECB政策理事会後に下落する展開となつたが、既に利上げの織込みが完了している(むしろ過熱感も感じられる)米ドル対比、ユーロは上昇余地も残されていると考えられる。今週は週半ばにFOMCを予定しているが、米国の利上げが相応に織り込まれている中、FOMC後にSell the factの動きからドル売りユーロ買いの展開となることに警戒したい。重要な経済指標としては、14日(火)にユーロ圏6月ZEW景気期待指数、15日(水)にユーロ圏4月鉱工業生産、ユーロ圏4月貿易収支、17日(金)にユーロ圏5月消費者物価指数の発表を控えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/6~6/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0506 高値 1.0774 終値 1.0510

(対円) 安値 139.85 高値 144.25 終値 141.33



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ: 1.2150 ~ 1.2400 164.50 ~ 167.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは、下落。細かい上下動を経て、週後半から週引けに掛けて下げ足を強めた。対円では、力強い上昇の先行から週引けに掛けて頭打ち、それでも週を振り返れば上昇。対ユーロでは、忙しない上下動を繰り返し、結局、高値圏で週の取引を終えた。主要通貨市場は、週明け直後から円全面安で始まった。円安の要因は、日銀が、引き続き長期金利を抑制、円安を放置する姿勢を明確にしたことを受け止められた(後述)。並行してポンドは、対円で明確に水準を切り上げ、8日までに168.72円まで上昇、2016年2月來の高値を更新した。7日、対ドル、対ユーロで下押ししていたポンドの反発は、同日発表された英5月サービス業PMIが、速報値から明確に上方修正されたこと(51.8→53.5)を好感した値動きと考えられた。8日から9日に掛けて、主要通貨市場が注目したのは、欧州中銀理事会(9日)。資産購入策の早期終了発表や、7月利上げに向けた明確な示唆が期待され、ユーロは上昇。7月1日までに資産購入終了宣言や7月の+25bp利上げ「予告」は市場の期待に応える「満額回答」と言えだし、9月の「大幅」利上げ示唆は、予想以上にタカ派的内容とすら言えたものの、ユーロは発表後しばらく上昇しただけで、程なく急落に転じてしまった。「噂で買って、事実で売る」値動きとも言えただろうし、7月の+50bp利上げの目を実質的に断ったことが、市場の一部の失望を買った可能性も考えられた。ポンドも対ユーロでは、8日に下押し、9日に続落後急反発と出入りを見せた。その後、週引けに掛けては、10日発表された米5月CPIの上振れと米長期金利急上昇をきっかけに、(米独長期金利差の拡大を要因視してか)ユーロが続落するのと並行して、ポンドはユーロに対して横ばい、対ドル、対円では、ユーロ安に連れた大幅安となった。

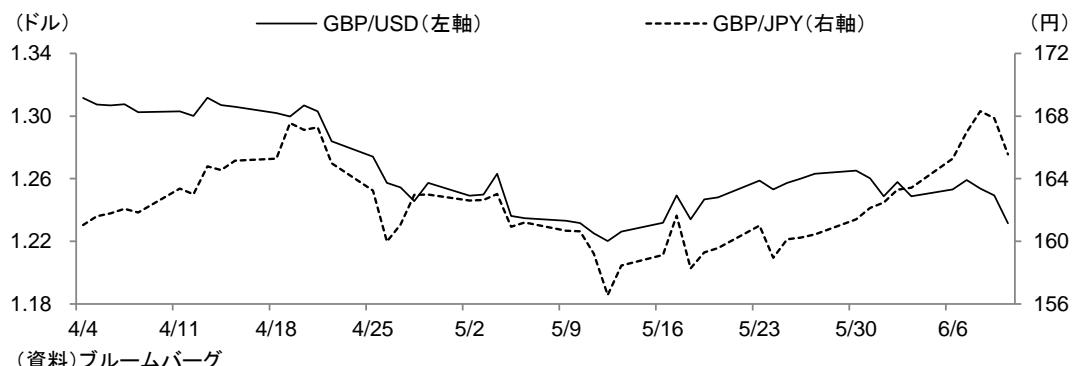
今週の英ポンド相場は、対円で堅調推移継続を予想。対円での堅調は、その他通貨に対しても一定の上昇圧力を供給するはずだが、対ドル、対ユーロでは方向感を欠いた横ばいから、軟調気味の推移を警戒する。円相場は一旦の底打ちを見せたものの、中期的な円安トレンドが一巡したとは考え難い。先週、円続落を招いたのは、日銀の長期金利抑制、円安容認姿勢だったが、とりわけ、黒田日銀総裁の「家計の値上げ許容度も高まっている」との発言(6日)が、当該姿勢を正当化しようとする試みとして注目を集めた。黒田総裁の本音は、値上げ許容度も「高まっている」ではなく、値上げ許容度も「高まるべき」、即ち、足許インフレを賃上げにつなげるべきとの思いにあったのではないか。仮に、黒田総裁が、日本経済全般における賃上げが、消費刺激に基づく成長促進と名目経済規模拡大による(相対的)債務圧縮につながるとの構想を描いているのなら、実際に賃上げが広がるまでその姿勢を崩す可能性は低い。参院選に向けて安定した支持率を維持する岸田政権がその姿勢に注文をつけてくる可能性も低いように思われる。英要因では、引き続き政局から目が離せない。ポンドへの影響ははっきりと読み取れなかったものの、先週、与党保守党がジョンソン党首(首相)に対する信認投票を実施(6日)、211票対148票で信任を得たことが注目された。ジョンソン首相への信任率(58.8%)は、2019年1月のメイ首相(当時)への信任(63.1%)よりも低く、メイ首相がその4か月後に辞任を強いられた経緯に鑑みれば、ジョンソン政権の先行きにも不安を抱かずにはいられない。今週は、13日(月)に英4月製造業/鉱工業生産、同貿易収支、14日(火)に英5月失業率(社会保険受給ベース)、2~4月平均賃金、17日(金)に英5月小売売上高などの英主要経済指標の発表が予定されている。景気減速を示す数字にポンド売り、景気拡大を示す数字にポンド買いと、素直な反応が見込まれるのではないか。16日(木)の英中銀金融政策委員会(結果発表)では、基準金利の+25bp引き上げ(1.00→1.25%)が見込まれているが、予想通りの結果であれば、ポンドの反応は限定的になろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/6~6/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2302 高値 1.2600 終値 1.2315

(対円) 安値 162.91 高値 168.73 終値 165.56



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1)今週の予想レンジ: 0.6950 ~ 0.7290

93.00 ~ 97.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.72台前半から0.70半ばへ下落した。6日は翌日にRBA理事会を控えて0.72ちょうどを挟み、比較的静かな値動きとなった。7日はRBA理事会ではインフレ抑制のため22年ぶりの+50bpの大幅利上げを決定し、政策金利を0.85%とした。市場予想では利上げ幅が+25bpと+40bpで意見が二分する中、ブルームバーグによる23人のエコノミストを対象とした事前調査では3人のみが+50bp利上げを予想しており、タカ派サプライズとなった。発表後は0.7185近辺から0.7246まで上昇し、その後2時間程で0.71台に戻した。NY時間では米10年債が下落し、米株が先週の下げを取り戻すと豪ドルはサポートされ0.7230近辺でNY引けた。豪ドル/円は94.90近円辺から96円台へ上伸した。8日は0.72を挟んで上下し、NY時間では原油が続伸した事で0.72台前半まで上昇するも、引けにかけては反対にインフレ加速懸念やインフレの抑制に向けて中央銀行が更にタカ派になるのではと警戒が強まり、米金利が上昇し米株が下落すると豪ドルは0.71台後半へ沈んだ。豪ドル/円は96.88円まで円安が進み年初来高値を更新した。9日はEC政策B理事会では7月に+25bpの利上げと債券購入の終了を表明。これをきっかけに世界経済成長への懸念が意識され、株が下落、米ドル買いの流れが強まり、豪ドルは0.70ちょうど近辺まで下落した。10日は足許でインフレ高騰が注目される中、米5月CPIはコアが前年比+6.0%と僅かに前月値を下回ったものの、ヘッドラインが前年比+8.6%と予想を上回り、40年来の大きな伸びを記録した。FRBに更なる積極的利上げを促す事となつた。数字発表後、短期金融市場ではFOMCの3会合連続+50bp利上げを織り込み、為替市場では怒涛のドル買いに豪ドルは0.7130近辺から0.7040近辺まで下落し、0.70台半ばで越週した。

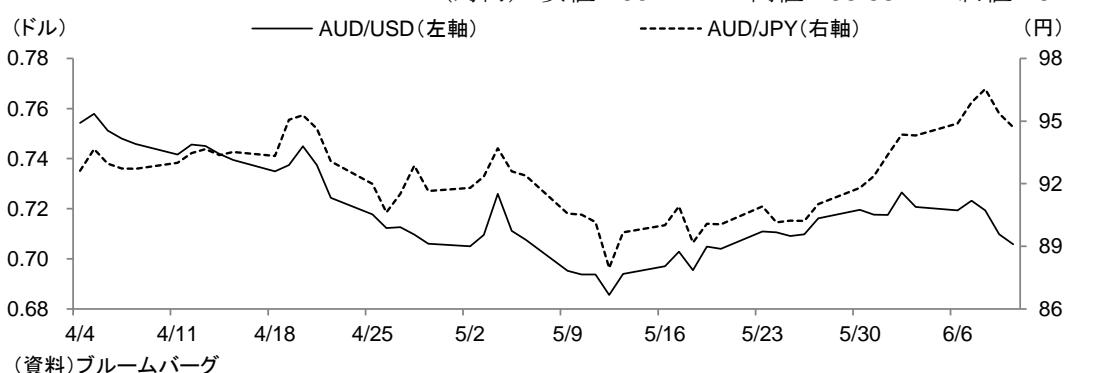
今週は14日(火)に豪5月企業景況感、米5月PPI、15日(水)に豪6月ウエストパック消費者信頼感指数、中国5月鉱工業生産、中国5月小売売上高、米5月小売売上高、FOMC、16日(木)にNZ1~3ヶ月 GDP、豪5月雇用統計、米5月住宅着工件数、17日(金)にNZ5月ビジネス製造業PMIと米5月鉱工業生産等の発表が予定されている。FOMCでは+50bpの利上げが広く織り込み済みの為、市場予想通り+50bp利上げでは特段大きな動きはない見ると見るが、先週金曜の米5月CPIで一段と積極的な金融引き締めが必要と予想されることから豪ドルは頭を押さえられる場面が多くなるとみる。この他、足許で中国国内で新型コロナ感染が再拡大している事でもセンチメントが悪化しやすく、豪ドルは重く推移すると推察する。但し、豪5月雇用統計で市場予想通りもしくはそれ以上に雇用者数が増加し、失業率が3.8%へ改善した場合、対豪ドルでのドル買いのポジションが一旦一部吐き出される可能性がある事に留意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/6~6/10)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7038 高値 0.7248 終値 0.7044

(対円) 安値 93.77 高値 96.88 終値 94.71



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。